



学校奇譚

—A School Story—



二人の男が喫煙室で、彼等の私立学校時代の話をしていた。Aが言った。『僕達の学校では、階段に、幽霊の足跡があったよ。どんなふうにだって？うん、ひどく不明瞭だった。角張った踵の靴の形でね。たしかそう記憶している。階段は石の階段だった。その足跡の由来について、僕はどんな話も聞いたことがない。考えれば変だろう？だって、何者かが、その足跡を捏造したのかも知れんからね。』

『ちいさな子ども達に、そんな話をしてはならないよ。子どもは、みんな自分自分の神話をもっているんだものね。ついでに君のために、一つの論題をあげようかね。―“私立学校伝説”という、ね。』

『収穫はむしろ乏しくともだね。僕は思うんだが、たとえばもし君にして、子ども達が学校でお互いに話すような幽霊話の一群を研究し

ようとするなら、それはみんな、結局本の話を押搾した翻案になってしまっだろう。』

『近頃ではストランドやピアソン〔第十九世紀のイギリスの物理学者。物理学の哲学的批判によって有名〕といった人達の説が、ひろく演繹されるのだからね。』

『まったくだ。あの人達が、僕の時代に生れなかつたり、僕の時代に思索しなかつたりしたらな。だが、待てよ。僕は、話に聞いた要点をおぼえているかな。――まず第一に、ある部屋をもった家がある。その中に一組の人々がいて、一夜をあかそうと言ひ張った。そして、夜があけると、その人々はみな、部屋の隅っこに膝まずいていた。そして“わしは見た！”と言ったかと思つたと死んだ――』

『それは、バークレー^{スクエア}街区の、家じゃあなかつたかい？』

『そうだったかかも知れん。――で、真夜中に往来でなにか物音がする

ので、それを聞きつけた人が、なんだろうと戸をあけたら、誰か四つんばいに這いながら、近かづいて来た。見ると眼が飛び出して、頬の上へブラさがっているのだった。いや、そのうえに――待てよ――そうだ！部屋の中に一人の男がベッドで死んでいた。その額には馬の蹄鉄の跡がついており、ベッドの下の床板にも、馬の蹄鉄の跡で一杯だった。どうしたわけかわからない。また、こんな話もある。或る変な家で、奥さんが寢室のドアに錠をおろすと、カーテンの間から、“さあ、これで私達は今晚中締めこまれたんだわ”という、細い声が聞えたそう。だ。こんな話には、どれも、説明も結論もあつたもんじやない。こんな家には、まだそうしたことが続いているらしい。』

『ああ、いかにもありそうなことだ。――僕が言ったように、雑誌かなんかからの、おまけを加えた話ならな。君は、或る学校で、ほんとうの幽霊が出たって話を、聞いたわけじやあなかるう？僕はそんなこ

とは考えもしない。今まで僕が出くわしたどんな人だって、そんな考えをもっていた者はない。』

『君がそういう言い方をすれば、僕は君こそ幽霊話をもっていると推定するよ。』

『いや、実際知らないんだよ。だが、一つ気になっている話がある、三十何年前、僕の学校で起った事なんだ。それに説明の加えようもないんだ。――』

『その学校はロンドンの近くにあった。大きな、かなり古い建物――ぐるりにきれいな庭のある、白塗りの建物だった。庭には、チームズ谿のやや古い多くの園で見かけられるような、大きな杉が立っていた。そして僕たちが野外遊戯に使う団地には、年古い榆にれの樹が茂っていた。僕は今でも心ひそかに、そのあたりが、まったく興味のある場所だったと思っている。だが生徒の中で、学校が相当な特色をもっていると

考えている者は、ほとんどなかった。

『僕がその学校にはいったのは、一八七〇年後間もなくの、或る年の九月だった。同じ日に学校へ着いた生徒の中で、一人好きになれた子があつた。高地ハイランド「ハスコットランドの北部」の子で、それを僕はまあ、マクロードと呼ぶことにしよう。暇をつぶして彼を描叙する必要はない。大事な点は、僕が彼と非常な知己になつたことである。彼はどの道異常な子ではなかつた——特に読書にすぐれているのでも、競技に巧みだというわけでもなかつた。だが彼は僕と気が合つた。

『学校は大きかつた。通例として百二十人乃至百三十人の生徒を収容しなければならなかつた。で、かなりの数の先生も必要だつたし、また時々先生の更迭もあつた。

『或る学期に——たぶん第三学期か第四学期だつたと思うが——一人の新任の先生が、僕のクラスに来られた。サムプソン先生といって、背

の高い、がっしりした、顔色の蒼白い、髭のある先生だった。僕達は先生が好きだった。先生は沢山旅行をしていられたので、遠足の時なんか、おもしろい話をしてもらえた。先生の声の聞えるそばにいようとして、僕達はよく押しあつたものさ。またこんな記憶もある——うむ、僕はあれ以来まるでそれを考えたこともないんだが——先生の懐中時計の鎖には、ちいさな飾りがついていた。ある日僕はそれに心をひかれた。先生はその飾りを僕によく見せてくださった。今から思えば、それはビザンチン金貨だった。一方には、なにかおかしげな皇帝の像がついていたが、一方はほんとうに、すべすべに擦りへらされていた。しかも先生はそこへ、乱暴に、自分の頭文字のG・W・Sと、一八六五年七月二十四日という日附を、自分で彫りつけていられた。そうだ。僕は今でもそれを目に浮べることができる。先生はこの金貨を、コンスタンティノープルで拾ったのだと言っていていられた。それは

フロリン「一八五〇年頃のイギリスの銀貨」くらいの、いやあれよりちよつと小さなものだった。

『ところで、まずはじめの奇怪な事件が起つたのは、こうだった。

『サムプソン先生は、僕達にラテン文法を教えていられたんだが、先生得意の教授法は―それはうまい方法だといつていいんだが―まず僕達の頭で文章を作らせ、それを土台に、学ぶべき規則を説明しようとするのだった。無論これは、できの悪い生徒に、出しゃばらせる機会を与えるやり方だ。果してそんなことが沢山起りもしたし、まあ、起りやすくもあつた。だがサムプソン先生は、いかにも善良な先生だったので、身をもつてそれがやれないように思えた。

『―或る時、“記憶すること”という言葉を、ラテン語でどう表現するかを教えるにあたって、先生は、動詞の *memini*（私は記憶する）を使つて、文章を作れと命じられた。で、大部分の生徒は、“私は私の

父を記憶する”とか“彼は彼の本を記憶する”とかいった、みな変哲もない普通の文章を作った。Memino librum meum（私は私の本を記憶する）と書いたのが、一番多かったように思う。ところが、さきに行ったマクロードという生徒は、たしかに、そんなことよりも、ずっと巧妙な文章を考えようとしていたんだね。ほかのみんなは作った文章をパスさせてもらって、もっとさきに進ましてもらいたいと思った。で、机の上から彼を蹴った。僕は彼の隣りに腰かけていたんだが、彼をつついて、早くしろとささやいた。でも、彼は平気だった。僕は彼の紙をのぞいて見た。まるでなんにも書いてはいない。で、また僕は肱で、前よりも強くついて、僕達みんなを待たしちやいけないと、するどく叱った。するときき目があつて、彼はハツと気を取り直したように、手早く紙に二行ほどなぐり書きをした。そしてその紙を残りの生徒といっしよに差出した。それは締切りの一番おしまい

か、或はおしまいに近い答案だった。ところが、サムプソン先生は、*memini scimus patri meo*（われ等はわが祖先を記憶す）云々と書いた生徒達に、なにかごてごて言っていたので、マクロードの答案の番になる前に、とうとう十二時の時計が鳴った。で、マクロードは、あとに残って、文章を直してもらわねばならなかった。

『僕が教室を出た時、そこにはいくらの生徒も出ていなかった。で、僕はマクロードが出て来るのを待った。やがて彼はいかにものろのろ僕のそばへやって来た。僕はなにかおもしろくないことがあったなと思った。“先生になんて言われたの？”と、僕はきいた。“うん、べつになんにも”と、マクロードは言ったが、“だけど、サムプソン先生は、なんだか僕が嫌いのようだ。”“ばかげたことでも書いて出したんじゃないかね？”“ううん。僕は一所懸命に、まちがわないように書いたんだよ。*memento*—これは、記憶せよという事にまちがないだ

ろう。この言葉は属格をとるね。だから僕はこう書いた。—memento

putei inter quatuor taxos (四つの木の間の井戸を記憶せよ)とね。”

“ばかなー！どうしてそんなことを書いたのかい？そりやなんのことだい？”と、僕は言った。するとマクロードはこたえた。“そりやあ変てこさ。僕にもなんのことか、はっきりわからない。わかっていることは、そんな言葉が、ふっとあの時頭のなかに浮かんだので、書いただけのことさ。僕が思った通りを書いたのさ。ペンをつかんだ途端、頭の中に、一枚の絵のようなものがあらわれた。その絵のようなものが、「四つの木の間の井戸」だったのさ。その木は赤い実をつけた、どす黒い木だった。なんの木だろう？” “そんな木は、ななかまどの木だろう。” “ななかまどって、聞いたこともない。いや、そうだ。いちいの木だよ。” “で、サムプソン先生は、どう言われた？” “なんだか、おかしいくらい妙な顔をされた。僕の文章を読むなり椅子から

立ちあがって、暖炉の方へ行かれた。僕に背を向けたまま、ずいぶん長い間なんにも言わないで、じっとしていられた。そして振り返りもしないで、ひどく静かに、お前の文章は、どういう意味なんかと訊かれたんだ。僕は思った通りを言った。ただそのばかげた木の名だけは、思い出せなかった。するとこんどは、なんのつもりで、こんなことを書いたのか、話してごらんといわれた。で、僕はあれこれと説明しなきゃならなかった。そのあと、先生は、もう文章について質問することはやめて、僕がこの学校に来て、どれくらいになるかだの、僕の郷里はどこかだの、そういったことを訊かれた。それから僕はそとへ出たんだが、先生は、あまりいい顔はしていられなかった。”

『このほか僕達がどんなことを言ったか、僕はおぼえていない。翌朝マクロードは悪寒おかんのようなものを感じて、ベッドについた。彼がまた学校へ出られるようになるには、一週間かそれ以上もかかった。そ

れから一ヶ月ばかりの間、これということも起らなかった。マクロー
ドが考えたように、サムプソン先生がほんとうに驚かれたのかどうか、
先生はそれを顔色には出されなかった。だが、僕は、先生の過去の歴
史に、なにかひどく妙なことがあるように信じられてならなかった。
しかし、これは、われわれ生徒が、こうした事を見ぬくほど、鋭敏だ
ったのだと言おうとしてるのではないよ。

『するとどうどうまた一つ、僕が今言ったと同じような出来事が起
った。―その日以来何度か、学校で、僕たちはラテン文法のいろんな
規則を学ぶために、例文を作らなければならなかったが、僕達は、ま
ちがった文章を作った時のほかは、先生からお小言を受けたことはな
かった。そのうちに、ある日僕達は約束法という、めんどろな文法に
とりかかることになり、それを未来形であらわす文を作れと、いいつ
けられた。僕達は、出来たり出来なかつたりの答案を提出した。サム

プソン先生は、それに目を通しはじめられたが、たちまち椅子を立って、なにか喉を妙に鳴らしながら、デスクのついわきにあるドアから、飛び出された。一二分僕達は腰かけたままだったが、僕はなにか文章に誤りでもあったのかと思った。―で、僕とひとりふたりの生徒が、デスクの上にある答案をのぞきに行った。きつと、誰かがばかげたことを書いたので、先生はその生徒を呼びに行かれたのだと思った。

『デスクにある一番上の答案は、赤インキで書かれていた。赤インキなんて、誰も使ってはいないし、その手蹟もクラスの誰のでもなかった。みんな―マクロードも誰も―それを見た。そして自分が書いたものでないことを、固く誓言した。僕は答案紙を数えようと思った。そして十分確実に数えたのだが、デスクの上には十七枚あった。しかも腰掛にいる生徒は十六人なのだった。僕はその余分の答案紙を鞆へ入れた。今でもたしかそれを持っていると思う。それにどんなことが

書かれていたかといえ、それはまるでつまらない、なんでもない文句なのだった。—*Si tu non veneris ad me, ego veniam ad te.*—つまり、「もしあなたが私のところへ来ないなら、私があなたの方へ行きますよ」という意味だ。』

『その紙を見せてもらえるかね?』と、「こ」まで話を傾聴していた男は言った。

『ああ、見せよう。—ところで、その紙については、また一つ妙なことがある。その日の午後、僕は、戸棚からその紙を出して見た。僕はそれが、その同じ紙だということを確かに認めただ。だって、その紙に念のため拇印をつけておいたんだからね。ところが紙には書いた文字がまるでなくなっているのだ。今もいった通り、僕はその紙を保存している。そして、僕は、隠顕インキでも使ったのじゃないかと考えて、その後いろいろ験^{ため}してみたんだ。だが、まるでわからない。

『まあ、話を進めるが、二十分ばかりしてサムプソン先生は、戻って来られた。そしてどうも気分が悪いから、みんな帰ってよろしいと言われた。先生はむしろ静かにデスクへ行かれた。そして一番上の例の紙に、またちよつと目を落された。先生は、自分で夢でも見ているんじゃないかという顔をされた。とにかく、先生はもう、なにも訊こうとされなかつた。』

『その日は、半どんの日だった。翌日、サムプソン先生は、いつもにちがわず、学校へ出られた。その晩のことだ。第三の、そして最後の事件が起つたのは。』

『僕とマクロードは寄宿舎で寝た。寄宿舎は本館とは直角になっていて、その二階にはサムプソン先生が寝ていられた。実にあかるい満月の夜だった。正確に言うことはできないが、なんでも一時と二時の間だったと思う。僕は誰かに揺り起された。見ればマクロードだ。な

んだかせかせかした様子で、“おい、泥棒だよ。サムプソン先生の部屋の窓へ、はいつたよ！”と言った。“じゃ、なぜ大声で、みんなを起さないのだい？”と、僕はできるだけ早口に言った。“いや、誰だかよくわからないんだからね。騒いじゃいけない。まあ来てごらんよ。”と彼は言った。僕はひどく焦れて、マクロードの名を、むやみに呼ぼうともした。ただ—自分にもわけはわからないが—なにか変事があつたように思えもし、それに自分一人で直面しなかつたとは、ほんとによかつたと思つた。

『僕達二人は、じつと窓からのぞき出していた。僕は口早やに、どうしてマクロードがこの物音を聞きつけたのかときいた。“僕はまるでなんにも、聞きつけたんじやないよ。だが、君を起す五分ばかり前に、僕はいつの間にかこの窓からのぞき出していたんだよ。すると、サムプソン先生の部屋の窓闕に、一人の男がからだを乗りかけて、中をの

ぞき込みながら、手招きしているようじゃないか。”と、彼は答えた。

“どんな風の人だい？”こうきくと、マクロードは、逃げを張るよ
うに、“わからない。ただ一つ—その男は、気味わるく痩せこけていて、
からだ中ずぶ濡れのようにだった。”

そう言いながら、マクロードはあたりを見まわして、まるで自分にも
聞えないほどの小声で、“僕にはどうしても、その男が、生きてる人
とは思えなかったよ。”

『僕達は、なおしばらくひそひそ話をつづけた。そしてとうとうベ
ッドへもぐりこんだ。寢室の誰も、この間に目をさましたり身動きし
た者もなかった。それから僕達はちよつとはまどろんだかな。しかし
翌日の僕達は至極平凡だった。

『ところが、サムプソン先生は、翌朝、行方知れずになってしまった。
その姿は遂に発見されなかった。僕は、先生の追跡について、今日ま

でなに一つ公表されていないと信じている。この事件をすっかり考え直してみると、もっとも奇怪なものは、マクロードも僕もこれまで誰にも話さなかったが、なんだろうと二人が見た、あの第三の人物に関する事実であるように思われる。この事件については、なんの疑問も向けられてはいない。もし疑問があるとすれば、僕は僕達がどんな答えもなし得ないと信ずる。僕達はこの事件について、解明することは不可能に思えるのだ。

『一以上が僕の話さ。』と、語り手は言った。『学校に関係した

ゴースト・ストーリー
幽霊談に近いもので、僕の知っている唯一つの話さ。だが、それにし

ても、僕は幽霊談ゴースト・ストーリーといったものに、近いと考えているだけなんだよ。』

この事件に後日譚があるとすれば、おそらく極めて月並みの後日譚が加えられる筈である。だが後日譚はある。だからそれを提出しなければならぬ。この話の聞き手は、一人だけではなく、もっとあった。

で、その年の終りだったか翌年だったか、こうした別の聞き手の一人が、アイルランドの或る田舎の宿に滞在していた。

或る晩のこと、宿の亭主が、喫煙室で、がらくた物を一杯に入れた抽斗ひきだしをひっくり返えした。すると亭主はちいさな函に手を置いて言った。『あなたは、古物こぶつについてはおくわしいでしょう。これはなんでしようか?』

私の友人—この話の聞き手の一人—は、その小函を開けてみた。中から飾りのついた細い金鎖が出て来た。彼はその飾りをもっとこまかに調べるため、眼鏡をはずした。『これにはなんか由来があるのかね?』と訊くと、『それがまったく奇妙なこととしてね。あなたは、あの灌木林の中の、水松いぢいの茂りを御存じでしょう?—二年前のことでしたが、私達は、ここの空地にある古井戸ふるいどを浚ぬえたのです。そこからなにが出たと思います?』という答えだった。

『屍体が出たとでもいうのかね?』と、友人は、変に神経過敏になつて言った。

『ええ、そうです。屍体が出たのです。しかも—とんでもない話ですが、二つまで屍体が出たのですよ。』

『ほう—二つもね?どうしてその二人が井戸に落ちたのか、わからないのかね?この金鎖は、それといっしょに出て来たのかね?』

『そうですよ。一人のほうに着ていた、ぼろ着物の中から出て来たんです。どんなわけがあるのか知りませんが、嫌なことですよ。一方の屍体が両手で、もう一方の屍体に、しっかりからみついていました。二つの屍体は、三十年かそれ以上も、井戸の中にいたにちがいありません。—私達がここで宿をはじめたよりも、ずっと前のことですよ。あなたは、私達がその井戸をしつかり埋めてしまったことは、御想像がつくでしょう。あなたは、手にお持ちのその金鎖の金貨に、どんな

ことが彫^ほりつけてあるのか、おわかりでしょうか？」

『ああ、わかりそうだね。』と、友人は、それを灯^{あかり}火にかざしながら、
（だが、べつにさほどの困難もなくその文字を読んで）言った。『G・W・
S——八六五年七月二十四日——と彫^ほってあるらしいな。』